

書評 風説書研究会編『オランダ別段風説書集成』

松本英治

書評 風説書研究会編『オランダ別段風説書集成』

松本英治

はじめに

オランダ風説書とは、江戸時代、オランダ船によってもたらされた定期的な海外情報を用いた。幕府に呈上され、最新の世界情勢を把握する手段として重要な役割を果たした。アヘン戦争の勃発を契機に、従来の風説書とは別に、より詳細な海外情報が提出されるようになり、これを別段風説書といった。別段風説書の掲載内容は、アヘン戦争のみならず、アジア・ヨーロッパの動乱や各国事情、科学技術の発達など、豊富で多岐にわたっている。

本書は、天保十一年（一八四〇）から安政四年（一八五七）までの一八年間に及ぶ別段風説書を収録し、その全貌を明らかにした史料集であるとともに、別段風説書をめぐる諸問題を、西洋史や日本文学史の研究を交えて多角的に追究した研究書である。青山学院大学教授岩田みゆき氏を代表者とする、二〇一六・一七年度の青山学院大学総合研究所プロジェクト「和蘭別段風説書」の研究」の研究成果であり、青山学院大学総合研究所叢書として刊行された。岩田氏によれば、プロジェクト

を立ち上げるきっかけは、長く風説書研究に携わり、別段風説書の集大成を望んでいた青山学院大学名誉教授片桐一男氏の熱意によるものとしている。

本書を編んだ風説書研究会は、片桐氏が会長をつとめる。岩田氏と青山学院高等部教諭佐藤隆一氏が中心となって史料調査と編纂作業を進め、並行して外部研究者も招いて公開研究会を開催し、研究活動に取り組んだとのことである。

一 本書の構成

本書の構成を示せば、以下の通りである。

序にかえて

片桐 一男

凡例

総論一 オランダ別段風説書解説

佐藤 隆一

総論二 別段風説書写本の所在状況について

岩田 みゆき

史料篇

第一号	天保十一庚子年（一八四〇）	別段風説書	長崎訳
第二号	天保十二辛丑年（一八四一）	別段風説書	長崎訳
第三号	天保十三壬寅年（一八四二）	別段風説書	長崎訳
第四号	天保十四癸卯年（一八四三）	別段風説書	長崎訳
第五号一	弘化元甲辰年（一八四四）七月	別段風説書	長崎訳
第五号二	弘化元甲辰年（一八四四）八月	別段風説書	長崎訳
〔参考史料一〕	弘化元甲辰年（一八四四）六月	別段風説書	長崎訳
〔参考史料二〕	文化元甲子年（一八〇四）	別段風説書	
第六号	弘化二乙巳年（一八四五）	別段風説書	長崎訳
第七号	弘化三丙午年（一八四六）	別段風説書	長崎訳
第八号	弘化四丁未年（一八四七）	別段風説書	長崎訳
〔参考史料〕	弘化四丁未年（一八四七）	別段風説書	江戸訳覚
第九号一	嘉永元戊申年（一八四八）	別段風説書	長崎訳
第九号二	嘉永元戊申年（一八四八）	別段風説書	江戸訳
第十号一	嘉永二己酉年（一八四九）	別段風説書	長崎訳
第十号二	嘉永二己酉年（一八四九）	別段風説書	江戸訳
第十一号一	嘉永三庚戌年（一八五〇）	別段風説書	長崎訳
第十一号二	嘉永三庚戌年（一八五〇）	別段風説書	江戸訳
第十二号一	嘉永四辛亥年（一八五二）	別段風説書	長崎訳
第十二号二	嘉永四辛亥年（一八五二）	別段風説書	江戸訳
第十三号一	嘉永五壬子年（一八五二）	別段風説書	長崎訳
第十三号二	嘉永五壬子年（一八五二）	別段風説書	江戸訳

〔参考史料〕	嘉永五壬子年（一八五二）	別段風説書	江戸訳
第十四号	嘉永六癸丑年（一八五三）	別段風説書	長崎訳
第十五号	安政元甲寅年（一八五四）	別段風説書	長崎訳
第十六号	安政二乙卯年（一八五五）	別段風説書	長崎訳
第十七号	安政三丙辰年（一八五六）	別段風説書	長崎訳
第十八号一	安政四丁巳年（一八五七）	別段風説書	長崎訳
第十八号二	安政四丁巳年（一八五七）	別段風説書	江戸訳
研究篇			
各論一	江戸時代の海外情報―鷹見泉石の情報活動―		片桐 一男
各論二	オランダ別段風説書―その公的回覧と私的書写―		佐藤 隆一
各論三	徳川慶勝筆写の嘉永四・五年別段風説書と黒田斉博の嘉永五年対外建白書―別段風説書と雄藩大名の海外情報認識再考―		岩下 哲典
各論四	《別段風説書》はいかに参照されたか―神奈川県立歴史博物館所蔵「阿部家資料」を事例として―		嶋村 元宏
各論五	別段風説書のなかのヨーロッパ―一八四八年革命を中心に―		割田 聖史
各論六	江戸のインテリジェンス―武器と凶器―		篠原 進
あとがき			岩田 みゆき

参考文献
研究協力機関・協力者一覧
執筆者紹介

二 本書の内容

以下、各篇・各論の内容の要点を紹介させていただきます。

「序にかえて」では、片桐氏が、自ら関わった風説書研究をふりかえりつつ、別段風説書の集大成をはかる研究史上の意義を述べている。風説書研究は、調査・研究対象が広範囲に及び、多額の研究費を要するものであることから、個人レベルで取り組むには限界があるとす。その上で、風説書研究の原点は海外情報がいかに利用・活用されたかの検証にあるとし、風説書と別段風説書をそろえて諸問題を検討する重要性を強調している。

佐藤氏による総論一、岩田氏による総論二は、史料篇の解題としての役割を果たしている。

総論一は、別段風説書の成立から終焉までの変遷と、記載内容の概要を解説する。まず別段風説書は天保一一年（一八四〇）に始まるとし、そこに至る日蘭双方の事情を説明する。当初は長崎訳のみであったが、弘化四年（一八四七）に江戸訳が登場するという。また、アヘン戦争情報に特化していた内容が、弘化三年（一八四六）以降は「別段風説書」の標題を付して世界情勢一般を記載するものへと大きく変化し、安政元年（一八五四）以降は国別・項目別の書式となったと述べる。最後に終

焉に至った事情を説明する。年次ごとの別段風説書の記載内容については、主要な事件の報道記事を表1と表2として、国名およびその関係記事を表3と表4としてまとめ、読者の便宜をはかっている。

総論二は、別段風説書の諸写本の所在調査についての報告である。所在調査は、これまでの研究の蓄積をふまえて進められ、調査によって確認された一四七件の別段風説書および複数の別段風説書を収録する文書は、表1としてまとめられている。掲載史料については、諸写本から選択を行い、それぞれの写本通りに翻刻する方針をとったとする。掲載史料の選択基準として、以下の五点が示されている。①誤字・脱字・脱漏・誤写などが少ないもの。②年月の記載があるもの。③通詞名の記載があるもの。④通詞の印があるもの。⑤一つの写本に集中させず、なるべくバラエティーをもたらせること。《各年次別段風説書 小解説》では、年次ごとに諸写本の書誌的特徴を解説しながら、掲載史料を選択した根拠を述べている。

史料篇では、天保一一年（一八四〇）から安政四年（一八五七）までの一八年間に及ぶ別段風説書について、年次ごとに長崎訳と江戸訳をそれぞれ一点ずつ翻刻して収録し、重要と思われる参考史料を付している。江戸訳は存在を確認できる六点と参考史料二点を収録する。掲載史料のそれぞれ冒頭には出典の記載がある。翻刻の方針は「凡例」に示されている。

研究篇の各論一から各論四は、以前から別段風説書をめぐる諸問題に取り組み、多くの成果を発表してきた研究者の論考である。一方、各論

五は西洋史、各論六は日本文学史を専門とする研究者の論考である。「あとがき」によれば、プロジェクトの公開研究会における報告をもとに執筆されたという。

各論一の片桐論文は、江戸時代の海外情報のあり方を概観したうえで、古河藩家老にして蘭学者として知られる鷹見泉石の情報活動を論じている。泉石が収集した海外情報の全体像を紹介し、風説書および別段風説書の入手に腐心していたこと、それらは主君である老中土井利位に呈上・報告されていたことを指摘する。役務としてあるいは個人としての情報活動が、泉石の知見を高めたのみならず、幕府要人や蘭学者に広く影響を与えたとしている。

各論二の佐藤論文は、幕府が別段風説書をどのように取り扱っていたのかを、私的書写から公的回覧へとという視点で、いくつかの段階を設定して考察を行っている。当初、別段風説書は機密文書として幕府の管理下におかれ、つてをたどって内密に入手したり、必要性に応じて幕府から内々に知らされたりするものであった。しかし、ペリー来航を契機に、従来の幕府の方針は大きく転換され、幕府内部で公的に回覧されるようになり、その範囲も拡大し、さらには諸大名へも回覧されるようになったことを明らかにしている。

各論三の岩下論文は、尾張藩主徳川慶勝が筆写した嘉永四・五年（一八五一・五二）の別段風説書、嘉永五年の別段風説書を引用する福岡藩主黒田斉溥の対外建白書を考察する。両者とも、すでに岩下氏が学界に紹介されたものであるが、最近の研究状況をふまえ、ペリー来航前後の

政治状況について再論を試みている。また、新たに「和蘭告密御請取始末 全」と題する写本を紹介し、別段風説書に書き込まれた朱書の注記を検討する。慶勝が筆写した「阿蘭陀機密風説書」は、大名本人が筆写した特筆すべき写本であることを強調するとともに、斉溥の「建白」という政治的行為に注目して、幕末期の雄藩大名の情報活動を展望するなかで、その契機として別段風説書の入手と活用を位置づけている。

各論四の嶋村論文は、老中阿部正弘の家に伝わった阿部家資料の嘉永三・四・五年（一八五〇・五一・五二）の別段風説書を組上に載せ、朱書の書き込みを検討し、別段風説書がどのように参照されたかを論じている。まず、表紙の分類記号に注目し、阿部家には嘉永年間の長崎訳と江戸訳の両者がそろえられていた可能性を指摘する。そして、書き込みの検討から、朱書をほどこした人物は特定できないものの、阿部家にあった別段風説書を通覧し、長崎訳と江戸訳を比較しながら校訂を行い、世界地図・世界地理書を参照して読んでいたことを明らかにしている。

各論五の割田論文は、「諸国民の春」と呼ばれた「一八四八年革命」が別段風説書でどのように報じられているかに着目し、嘉永元・二年（一八四八・四九）の別段風説書のオランダ語原文・長崎訳・江戸訳を比較して検討を加えている。その結果、長崎訳・江戸訳ともに翻訳は適切に行われているが、内容の理解は不十分であった可能性を指摘する。また、別段風説書のヨーロッパ情報が、何を情報源とし、どのように取捨選択されて記載されたかは、今後の課題としている。

各論六の篠原論文は、江戸時代の情報社会のあり方を、多様な文学作品の記述をもとに論じている。商業活動において情報は「武器」であったこと、一方で為政者側にとって情報は「凶器」であったことを指摘し、紀州藩士が書き留めた『家乗』に記される様々な情報と情報源を紹介する。別段風説書を直接に論じているわけではないが、情報を見きわめる知性は江戸時代から現在につながる普遍的な課題であることを強調している。

「あとがき」では、岩田氏がプロジェクトを立ち上げた経緯が説明され、本書の概要が述べられている。また、「参考文献」は、佐藤氏による作成とのことである。

三 研究史上的位置

本書の刊行は、研究史のうえでどのように位置づけられるだろうか。現在に至る風説書研究の動向を概観しつつ、位置づけをはかりたい。

寛永一八年（一六四一）から安政四年（一八五七）までの通常の風説書は、法政蘭学研究会による諸写本の調査と校合作業を経て集大成され、『和蘭風説書集成』上・下巻（吉川弘文館、一九七七・七九年）として刊行されている。岩生成一氏の指導のもとで行われた法政蘭学研究会の活動は、戦前の板沢武雄氏の研究を継承するものであったが、新たな視点として通常の風説書と別段風説書を区分して取り扱う方針がとられている。続いて別段風説書の集大成を企図して準備が進められていたことは、『和蘭風説書集成』上巻に寄せた岩生氏の序文にも見えており、

片桐氏が執筆された解題でも別段風説書を区分した解説がなされている。また、別段風説書に関する最初の専論である安岡昭男氏の「和蘭別段風説書とその内容」（『法政史学』第一六号、一九七〇年）は、集大成された際の解題に向けて準備されたものという。しかし、別段風説書の集大成は諸般の事情から実現せず、年月を経ることになってしまった。この間の経緯は、「序にかえて」で片桐氏が述べられている。

一九九〇年代以降、海外情報の収集・分析・活用といった情報活動の論点が提唱され、風説書をめぐる個別研究は大きく進展した。とりわけ別段風説書への関心は、幕末維新の政治・社会状況を情報を切り口として研究する動向と相まって高まりを見せた。本書の執筆者である佐藤氏・岩下氏・嶋村氏は、その牽引役を担ってきた研究者である。特性をもつ別段風説書の写本の紹介が進むとともに、別段風説書の入手ルートや政治的活用などが明らかにされていった。このような研究動向は、片桐氏と安岡氏の研究により、通常の風説書と別段風説書の基本的理解が確立したことが背景にある。それとともに、別段風説書を収録する史料集がなかったことが反作用して、当時の若手研究者が追究すべき課題が山積していると認識したためではないだろうか。

しかしながら、別段風説書を読むには、『大日本古文書 幕末外国関係文書』などの刊本に収録された記事を利用したり、史料所蔵機関にある写本を利用したりするしか方法はなかった。特に初期の別段風説書を収録する刊本はほとんどない。これはすこぶる不便な研究環境で、各年次の記載内容を通覧することは容易ではなく、どの刊本・写本に依拠し

て引用すればよいかも悩ましいところであった。かくして、別段風説書の個別研究が進展する反面、依拠すべき史料集を欠くという状況が長く続くことになったのである。

別段風説書の研究にとって画期をもたらしたのが、松方冬子氏の研究である。二〇〇〇年代に、松方氏はオランダ側史料に基づいて史料論的視点から風説書研究に取り組み、その成果は『オランダ風説書と近世日本』（東京大学出版会、二〇〇七年）にまとめられた。松方氏は、通常の風説書と別段風説書の違いとして、通常の風説書は長崎で作成されるのに対して、別段風説書はバタヴィアで作成され、オランダ語原文が送付されてくることを明らかにした。従来、記述の長短や記載内容でしか差異を説明できなかった両者の違いが明確となった。また、オランダ側史料に基づいて、オランダ語原文の送付は一八四〇年から一八五七年までであることを実証された。

さらに松方氏は、語学に堪能な若手研究者とともに、オランダ語原文の翻刻と翻訳に取り組み、年次ごとにオランダ語原文と現代日本語訳を併記する論文を続々と発表された。これらをもとに、現代日本語訳に注記と解説を収録して、『別段風説書が語る一九世紀―翻訳と研究』（東京大学出版会、二〇一二年）を刊行された。同書によって、別段風説書を現代日本語訳で通覧することが可能になった。また、江戸時代の訳文ではほとんど意味不明のカタカナ書きの地名・人名などが、オランダ語原文からの現代日本語訳によって初めて理解できるようになった。

このような研究段階に至り、江戸時代の訳文としての別段風説書の集する方針が採用されている。この方針は、底本を定めて諸写本の校合作業を行った『和蘭風説書集成』上・下巻とは異なるところである。別段風説書の場合、通常の風説書と比べて写本数は膨大であり、誤記・誤写などを含め写本間の異同があまりに多いという事情がある。時間を費やして校合作業を行っても、正本の復元が見通せるわけではない。特定の写本の翻刻としたことは、きわめて妥当な判断である。

掲載史料の選択基準は、総論二に示されている五項目である。膨大な写本からの選択を求められるだけでなく、基準のなかで何を優先するかの問題もあるから、たいへん悩ましい作業であったと察せられる。総論二の《各年次別段風説書 小解説》は、諸写本の書誌的事項について簡潔ながらも射的解説がなされている。掲載史料を選択した判断根拠を知ることができると同時に、掲載史料以外にも注目すべき特性をもつ写本があることに気づく。今後の研究者の導きとなるに違いない。さらに今後は、諸写本の比較を通じて系統を判断できれば、そこから国内における別段風説書の広まりを展望できるだろう。

諸写本の所在調査による新たな判明点もある。評者がとりわけ注目したのは、以下の二点である。①これまで存在しないと見られていた弘化四年の江戸訳は、蘭学者の家である箕作家と鷹見家の文書のなかに要点を記した訳文が見出され、江戸での翻訳が確認できること。②長崎歴史文化博物館所蔵の『自嘉永四年至安政四年 風説書』は、阿蘭陀通詞名の後に押印がある別段風説書を収載し、長崎訳の正本と考えられ、草稿とともに綴じられていること。①は第八号の参考史料、②は第十二号か

大成は、いっそう強く求められることになった。松方氏は前掲書の解説で「別段風説書の内容は、当時の日本人にどの程度理解できたのか？どう理解されたのか？」を考える一つの重要な手がかりが、翻訳の有り様であると述べられている。今後の研究における一つの方向性を示す指摘である。翻訳の有り様を比較・検討するためには、良質な江戸時代の訳文のテキストが求められる。また、当時の日本人の理解を考える手がかりは、翻訳の問題にとどまるものではない。訳文としての別段風説書はどのような人々が読み、どのように理解した、理解しようとしたのかも問われるべきであろう。当時の人々は、写本を通じて別段風説書を入手した。全国各地に残存する諸写本の調査は、どのような人々が読んだかを明らかにし、それぞれの理解に迫る基礎的作業である。

本書の刊行は、長年にわたって研究者に渴望されていたものである。しかし、遅きに失したのでは決してない。早くに集大成されなかったがゆえに研究が活性化し、現在の研究の到達点となって改めて必要性が高まったというのが実状である。このようにとらえるとき、本書は時宜を得ての刊行となったといえるだろう。

四 史料篇へのコメント

研究史からもわかるように、本書の最大の功績は、全国各地に残存する諸写本の調査に基づいて、年次ごとに写本を選んで翻刻し、長崎訳と江戸訳の両者を収録した史料篇にある。史料篇に収録された別段風説書は、正本の復元を目指したのではなく、選択した写本をそのまま翻刻

ら第十六号までの長崎訳の掲載史料となっている。

一つだけ望蜀を述べさせていただけば、史料集として利用するだけに、地名・人名・語句には注記や索引がやはり欲しかったと思う。限られた時間のなかでの編纂作業であったことは承知している。また、ほとんどはカタカナ書きであり、掲載史料のなかでも表記の異同は多く、注記や索引をつける作業が容易ではないことも十分に理解できる。索引は、総論一の表が代替する役割を果たしてくれている。しかしながら、カタカナ書きの地名・人名などを注記なしで理解するのはかなり困難である。掲載史料の内容理解にあたっては、『別段風説書が語る一九世紀―翻訳と研究』に収録された現代日本語訳とその注記に頼らざるを得ない。同書と本書を、あわせて利用する研究姿勢が必要となっている。

五 研究篇へのコメント

ここでは研究篇の各論を通読して見えてくる、今後の研究の方向性について、少しばかり卑見を述べさせていたきたい。

各論に共通するのは、各執筆者がこれまで取り組んできた研究成果のうえにたつて、別段風説書の活用と理解が論じられていることである。評者は、四つの方向性が示されていると理解した。

一つ目は、人物に注目して、文書群・文庫のなかで別段風説書を考察する重要性である。各論一の片桐論文では鷹見泉石と鷹見家資料、各論三の岩下論文では徳川慶勝・黒田斉溥と慶勝手元文庫、各論四の嶋村論文では阿部正弘及びその側近石川和助と阿部家資料が取り上げられてい

る。いずれも大名家や大名家家臣の事例である。今後、蘭学者の家である箕作家や大槻家の事例で取り組みができないであろうか。また、国学者や豪農・豪商の場合はどうか。文書群や文庫に当時のすべての資料が残されているわけではなく、また全体を通覧する作業は多大な時間を要するから、取り組みは容易ではない。しかし、他の事例研究が進めば、別段風説書の理解と活用の新たな姿が見えてくることが期待できる。

二つ目は、幕府政治の展開のなかで別段風説書の活用を位置づけてゆく政治史的研究である。各論二の佐藤論文では機密から公開へと転換していく別段風説書の取り扱いから幕府政治の展開が論じられ、各論三の岩下論文では別段風説書の入手を契機とする「建白」という行為に注目して大名の幕政参与を展望している。天保期から安政期における政治史は、膨大な研究の蓄積がある。それらをふまえ、幕府の諸政策とその相互の関連のなかで、別段風説書をどう位置づけていくかが求められる。当初、機密として取り扱われたことは、天保改革の諸政策、とりわけ長崎支配の問題のなかでとらえる必要がある。また、ペリー来航後、公開へと転じたのは、海防強化を模索する安政改革の一つと見られる。江戸訳を担うようになった蕃書調所の役割も問われてくる。さらに機密であれば、入手して「建白」といった活用を試みるのが政治力の源泉となるだろうが、公開されるようになれば、どのような変化をもたらすのだろうか。それは「公議世論」の形成とどのような関係にあるのか。細部の実証をふまえ、幕末政治史の大局的観点から論じられるべき課題とと思う。

見地からの研究が進展することも大いに期待される。

研究篇に関して一つ気になったのは、共同研究であるならば、各論相互と、各論と総論のなかで、もう少し原稿のすり合わせが必要だったのではないかということである。各論三の岩下論文で、ペリー来航直前に御三家に正式に別段風説書が伝達された意義が強調されており、また総論二でより広範な諸藩に別段風説書が回覧された津軽家文書の写本が紹介されている。これらは各論二の佐藤論文のなかで論じられてもよかったと思う。また、各論三の岩下論文では架蔵の「和蘭告密御請取始末全」が紹介されているが、総論二に記されている大槻文庫の写本については触れられていない。さらに、各論五の割田論文で、一八四六年以降の別段風説書の構成は、当時のヨーロッパで刊行されていた新聞の一般的な紙面構成であったと指摘されている。これまで指摘されることのない点だけに、構成を解説する総論一のなかで言及があってもよかつたのではないか。もちろん、紙幅の関係や重複を避ける意図、研究期間の時間的制約もあつたであろうが、配慮が欲しかつた気がする。

研究篇が示す研究の方向性に異論をはさむ余地はないが、別段風説書そのものにも解明されるべき課題が残されている。評者は、拙著『近世後期の対外政策と軍事・情報』（吉川弘文館、二〇一六年）において、近世後期の対外政策のあり方は、外交文書の翻訳をはじめとする長崎の阿蘭陀通詞が有する特権を、江戸の天文方が奪っていく過程ととらえることができるのではないかとの見通しを示した。評者の問題関心に即した指摘となつて恐縮だが、本書を通して感じられた別段風説書そのもの

三つ目は、別段風説書がどのように読まれ、どのように理解されたかの追究である。各論三の岩下論文、各論四の嶋村論文が、ともに別段風説書に書き込まれた朱書を考察していることが印象的である。本書の史料篇を見ただけでも、書き込みをもつ写本が多いことがわかる。書き込みは、どのように読んだかの証左である。当時の読み手にとって、別段風説書の記述は相当に難解だったはずで、広範な記載内容のすべてに注目したわけではないと思われる。どのような記載内容に注目し、どのような手段で理解に努めたのか。それは、どのような行動と結びつくのか。また、長崎訳と江戸訳を比較した書き込みをもつ写本も少なくない。長崎訳と江戸訳の比較は、誰が何のために行ったのか。ただ単に翻訳の正誤を確認するために行われたものか、それ以上の別の意味をもつものなのかが問われてくるだろう。

四つ目は、日本史の分野にとどまらない、多方面・他分野から別段風説書の研究に取り組む必要性である。本書の刊行によって、長崎訳と江戸訳を通覧することが可能となった。松方氏らの研究成果によって、現代日本語訳とオランダ語原文にもアクセスできる。これらが活字化されたことで、多方面・他分野の研究者が別段風説書を容易に読める研究環境が整ったのである。各論五の割田論文は、オランダ語原文・長崎訳・江戸訳の比較を試みている。このような比較から、当時の理解を問う研究は、西洋史・東洋史の分野から積極的になされるべきであろう。また、松方氏もすでに指摘されているが、翻訳という行為は、近代日本語がどのように生み出されていったかの問題である。語学研究者の専門的

の大きな課題を二点ほど述べさせていただく。

一つは、提出が始められた経緯である。別段風説書は、一八四〇年五月の東インド総督の決定に基づき、定期刊行物に基づくアヘン戦争情報を、従来の風説書とは別に、バタヴィアからの書面に基づいて日本側に報告することで始められた。これは、幕府の要請に基づく措置だったのだろうか。前年の天保一〇年（一八三九）七月の日付をもつ天文方洪川六蔵の上書では、風説書の作成過程における阿蘭陀通詞の情報操作を問題視し、従来の風説書とは異なるかたちで、詳細な海外情報を封印させた文書で長崎奉行に提出させ、江戸で翻訳を行うという主張がなされている。この上書が東インド総督の決定を誘発した可能性が考えられるが、両者の因果関係は実証されていない。もし洪川の上書が契機になったのであれば、イギリスの一般的な脅威はあるにせよ、幕府はアヘン戦争の詳細を求めたわけではないことになる。別段風説書の当初の目的は、阿蘭陀通詞の情報操作を防ぐために、文書による提出と江戸での翻訳に主眼があつたのかもしれない。

もう一つは、翻訳作業を含めた長崎と江戸における取り扱いである。いいかえれば、長崎訳と江戸訳がどのように作成されたかということである。長崎訳を見ると、二名から十数名の阿蘭陀通詞の署名と捺印が見られる。二名の場合は選ばれて翻訳を行ったと考えられる。一方で十数名の場合は、通詞目付と大・小通詞の全員であろう。全員で翻訳したと見ることができ、通詞仲間による翻訳という既得権を主張した措置のようにも思われる。翻訳は困難を極めたであろうが、どのくらいの期

間を要したのか。また、江戸に送付された後、幕府は長崎訳と原文をどのように取り扱ったのか。江戸訳については、蕃書調所の設立以前は翻訳者の記載もない。翻訳は毎年行われたのか。行われたのであれば、翻訳者は天文方に詰めた阿蘭陀通詞か、それとも蛮書和解御用の蘭学者なのか。時期による変遷も想定しながら、その実態を明らかにしていくことが、別段風説書の本質を理解するうえで重要だろう。

おわりに

以上、本書の構成と内容を述べたうえで、研究史上の位置づけをはかり、史料篇と研究篇について卑見を述べさせていただいた。

本書は、別段風説書の集大成を望まれていた片桐氏の熱意と、限られた調査・研究期間のなかで取り組まれた岩田氏と佐藤氏の尽力によって生み出されたものである。繰り返しとなるが、本書は長年の研究者の要望に応えると同時に、研究史的にも時宜を得た刊行である。『和蘭風説書集成』上・下巻に続いて、吉川弘文館から刊行されることも喜ばしい限りである。そして何よりも、このようなプロジェクトを主催した青山学院大学が、学界に誇るべき研究成果といえる。

文中において評者の誤読や誤解による非礼があれば、執筆者および読者のご海容を乞う次第である。本書が多方面・他分野からも広く利用され、別段風説書の研究が進展することを願って止まない。

(吉川弘文館、二〇一九年三月、七二八頁、A5判、税別一万五千円)

〔付記〕

本稿の概要は、令和二年度科学研究費補助金、基盤研究(B)「オンライン別段風説書の研究」(研究代表者：岩田みゆき) 第二回研究会(二〇二〇年八月二十九日、Webex Meetings)において報告させていただく機会を得た。岩田先生をはじめ、ご意見を頂戴した皆様に御礼申し上げます。

執筆者紹介(掲載順)

- | | |
|-------|--------------------------------------|
| 岩田みゆき | 本学文学部史学科教授 |
| 割田 聖史 | 本学文学部史学科教授 |
| 松本 英治 | 開成中学校・高等学校教諭、本学文学部
附置人文科学研究所特別研究員 |
| 二宮 文子 | 本学文学部史学科准教授 |